

## 中学生の友人関係と学校適応との関連

粕谷 貴志 奈良教育大学大学院 (教職開発専攻)

(平成25年5月7日受理)

## The Relationship between Friendship and Adaptation in Junior High School Students

Takashi Kasuya

(Department of Professional Development in School, Nara University of Education)

(Received May 7, 2013)

### Abstract

The purpose of this study was to examine relationship between friendship and adaptation in junior high school students. The survey was conducted among 1705 junior high school students. First, the relationship between the number of things known of close friend and friendship were examined. Results showed that the number of things known was related to their friendship. Second, the relationship between the number of things known of close friend and adaptation were examined. Results showed that the number of things known was related to their adaptation. These results suggest that in case of maladapted junior school students, psycho-educational intervention requires attention to their friendship.

**キーワード** : 学校適応、友人関係、中学生

**Key Words** : adaptation, friendship, junior high school student

### 1. 問題と目的

文部科学省の調査(2012)によると、平成23年度の中学生の不登校数は94,836人(2.64%)であった。ここ数年でみると若干の減少傾向の見られる年度があるものの、依然として高い値で推移している。この出現率は、38人に1人の割合で不登校生徒が出現する数値であり、単純に考えると学級に1人は不登校生徒がいる計算である。相変わらず深刻な状況といえよう。

不登校などの学校不適応問題の要因は、友人関係などの学校環境における対人関係上の問題が指摘されてきている(学校不適応検討委員会、1991; 河村、1999; 文部科学省、2001; 粕谷・河村、2002; 酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村、2002など)。また、文部科学省(2011)は、不登校児童生徒への効果のあった指導として、教師との関係の改善や授業や教科指導の改善などと合わせて、「友人関係の改善のための指導」を指摘している。学校不適応の背景には、友人関係などの対人関係の問題があり、そ

の予防的対応には、友人関係の形成などの指導・援助が必要とされていると考えられる。

一方、中央教育審議会(2008)は、子どもたちの現状と課題として、友達や仲間のことで悩む子どもが増えるなど、人間関係の形成が困難かつ不得手になっていることを指摘した。友人関係などの対人関係上の問題が学校不適応の要因として重要視されるなかで、近年、良好な友人関係を形成することが困難な生徒が増加する実態となってきた可能性が考えられる。学校不適応の対策としては、このような児童生徒の実態に応じた指導・援助が求められている状況であると考えられる。

小野寺・河村(2002a、2002b)は、中学生の友人関係における自己開示の程度を測定する尺度を開発し、学校適応との関連を検討している。これらの研究では、友人関係のなかで話される内容13項目について話す程度を自己開示度として、その程度が高いほど学校適応が良好である傾向を明らかにした。友人とどのようなかわりをもっているかという友人関係の質的側面が、学校適応

と関連する重要な要因であることが明らかにされたといえよう。

本研究では、中学生の友人関係と学校適応の関連を明らかにし、学校不適応に対する心理教育的援助の視点を明らかにすることを目的とした。具体的には、中学生を対象に、友人関係の質的側面をとらえる視点として「親しい友人について知っていること」について回答を求め、その結果と現在の友人関係、学校適応との関連を検討した。

## 2. 方法

### 2.1. 調査対象

東北地方および中部地方の公立中学校5校に通う中学1～3学年1,705名（男子888名、女子817名）であった。

### 2.2. 調査時期および手続き

2学期末の11月下旬から12月に、各学級で担任が以下の内容から構成された質問紙を配布し、回答を求めた。

### 2.3. 質問紙構成と内容

フェイスシートには、学校生活の事柄について尋ねる旨を示し、調査は学校の成績とは無関係であることを記載した。質問紙は、学年、性別の回答欄のほか、以下の質問項目を用いた。

#### （1）友人について知っていること

もっとも親しい友人について知っていることとして、以下の11項目から多肢選択式（複数回答法）で回答を求めた。「好きな歌手やタレント」「好きな食べ物」「好きな教科」「見ているテレビ番組」「誕生日」「家族のメンバー」「家族の職業」「友だち関係」「将来の夢」「好きな人やつき合っている人」「自分と相手だけの秘密」。項目は、現職の中学校教員2名と教育心理学を専門とする研究者1名の3名で、中学生の実態と自己開示の程度を考慮して作成された。

#### （2）現在の友人関係

現在の友人関係について把握するために以下の2つの質問項目を用いた。「いやなことがあっても、友だちといると元気が出たりホッとしたり、落ち着いたりする」（「いつもそうである」～「まったくそうでない」の4件法）。「悩みを話せる友人は何人いますか」（「6人以上」「4～5人」「2～3人」「1人」「ひとりもない」の選択法）

#### （3）学級適応の測定

学級適応を測定するために、学級満足度尺度（河村、1999）を用いた。この尺度は、承認と被害の2因子構造が確認されている。被害得点をX軸に、承認得点をY軸にとり、それぞれの平均点の軸によって分けられた4象限をそれぞれ、学級生活満足群、非承認群、侵害行

為認知群、学級生活不満足群として4群にカテゴリー化することにより援助ニーズを把握する方法が提唱されている（河村、1999）。この4群はそれぞれ次のような特性が指摘されている。①学級生活満足群は、学級内でいじめや悪ふざけなどの侵害行為を受けている可能性が低く、かつストレスや不安も少ない、また、学級内に居場所を持ち、自分の価値を認められていると思っている生徒群である。②非承認群は、学級内でいじめや悪ふざけなどの侵害行為を受けている可能性は低いが、自分の居場所を見出していない傾向をもち、学級内で認められることが少なく、自主的に活動しようという意欲が乏しい生徒である。③侵害行為認知群は、学級内で悪ふざけを受けているか、他の生徒とのトラブルがある可能性が高いと考えられる。学級内では自主的に活動するが、少し自己中心的な面が考えられ、それがトラブルを起こす原因になっている可能性がある生徒群である。④学級生活不満足群は、学級内でいじめや悪ふざけを受けている可能性が高いか、生徒自身の不安傾向が強いと考えられ、学級に居場所がなく学級の友だちから認められる機会が極めて少ない生徒群であると考えられる。いじめ被害の可能性や不登校に至る可能性が高い生徒であることが推測される。

## 3. 結果

### 3.1. 尺度結果の記述統計と男女差

友人関係について知っていることと現在の友人関係との関連について検討をおこなった。

分析にあたっては、欠損値があったデータを除外し、1,605名（男子830名、女子775名）のデータをもちいた（有効回答率94.1%）。

「もっとも親しい友人について知っていること」の回答出現率を男女間で比較したところ、すべての項目において性別によって有意な偏りがみられ、男子より女子の方が有意に「知っている」の選択が多い傾向が見られた（表1）。友人について知っていることの選択数を、項目の自己開示の程度を考慮して、「0」「1～3」「4～6」「7以上」の4群に分け、出現率を男女間で比較したところ、性別によって有意な偏りがみられ、「7以上」のカテゴリーにおいては女子が男子より多い傾向、 「0」「1～3」のカテゴリーにおいては男子が女子より多い傾向がみられた（表2）。また、「いやなことがあっても、友だちといると元気が出たりホッとしたり、落ち着いたりする」についての回答の得点平均を友人関係得点として、男女間で比較したところ、有意差が見られ（ $t = 6.07$ ,  $p < .05$ ）、女子の得点平均が男子より高い結果であった（表3）。さらに、「悩みが話せる友人は何人いますか」についての回答の出現率を男女間で比較したところ、有

意差がみられ ( $\chi^2(4) = 37.21$ ,  $p < .01$ )、残差分析結果から、男子の方が「6人以上」「ひとりもない」の回答が多い傾向および、女子の方が「4～5人」「2～3人」

の回答が多い傾向がみられた(表4)。これらの結果から、以後の分析は、男女別におこなうこととした。

表1 「友人について知っていること」の男女別回答出現数(複数回答)

	男子 $n = 830$		女子 $n = 775$		$\chi^2$ 値	
	知っている	知らない	知っている	知らない		
好きな歌手やタレント	293	537	482	293	116.07	**
好きな食べ物	259	571	411	369	78.52	**
好きな教科	402	428	431	344	8.27	**
見ているテレビ番組	366	464	438	337	24.73	**
誕生日	415	415	688	87	280.32	**
家族のメンバー	505	325	674	101	140.29	**
家族の職業	269	561	386	389	50.21	**
友だち関係	512	318	592	183	40.34	**
将来の夢	269	561	380	395	45.98	**
好きな人やつき合っている人	280	550	401	374	53.20	**
自分と相手だけの秘密	264	566	386	389	53.88	**

\*\* :  $p < .01$

表2 男女別の友人について知っている数カテゴリーの人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果

		男子 $n = 830$		女子 $n = 775$		$\chi^2$ 値	
7 以上	$n = 636$	206		430		241.77 $df = 3$	**
		-12.55	**	12.55	**		
4 ～ 6	$n = 576$	301		275			
		0.33		-0.33			
1 ～ 3	$n = 352$	289		63			
		12.76	**	-12.76	**		
0	$n = 41$	34		7			
		4.49	**	-4.49	**		

下段は調整された残差

† :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

表3 友人関係得点の男女別平均と標準偏差および  $t$  検定結果

	男子 $n = 830$	女子 $n = 775$	$t$ 値
友人関係得点	2.99 (0.77)	3.21 (0.70)	6.07 *

( ) 内は標準偏差

\* :  $p < .05$

表4 悩みを話せる友人数カテゴリーの男女別人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果

		6人以上 $n = 424$	4～5人 $n = 437$	2～3人 $n = 570$	1人 $n = 65$	0人 $n = 109$	$\chi^2$ 値
男子	$n = 636$	237	203	273	34	83	37.21 $df = 4$
		2.01	-2.58	-2.27	0.10	5.29	
		**	**	**		**	
女子	$n = 576$	187	234	297	31	26	
		-2.01	2.58	2.27	-0.10	-5.29	
		*		**		**	

下段は調整された残差

### 3.2. 友人について知っていることと友人関係

友人について知っていることの選択数カテゴリーごとに、友人関係で元気が出たり落ち着いたりするかどうかを尋ねた項目の得点平均を比較した。具体的には、友人について知っていることの数のカテゴリーを独立変数、「いやなことがあっても、友だちといると元気が出たりホッしたり、落ち着いたりする」についての回答を友人得点として従属変数にした一元配置の分散分析をおこなった（表5）。その結果、友人について知っていることの数カテゴリーの効果が有意（男子： $F(3,826) = 21.71, p < .01$ 、女子： $F(3,771) = 17.39, p < .01$ ）であった。多重比較の結果、男女で若干違いがみられるものの、全体的には、友人について知っている数が多いほうが、元

気が出たり落ち着いたりする友人関係を形成している傾向が見られた。

次に、友人関係について知っていることの数カテゴリーと悩みを話せる友人の数との関連を検討するために、友人関係について知っている数のカテゴリー別の悩みを話せる友人数の選択の出現率を比較した。 $\chi^2$ 検定の結果、男女ともに出現率の偏りが有意（男子： $\chi^2(12) = 132.65, p < .01$ 、女子： $\chi^2(12) = 77.91, p < .01$ ）であったので、残差分析を行った。その結果、男女ともに、友人について知っている数が多いカテゴリーにおいて、有意に悩みを話せる友人の数が多く、友人について知っている数が少ないカテゴリーにおいて悩みを話せる友人の数が少ない結果であった（表6-1、表6-2）

表5 友人について知っている数カテゴリーごとの友人関係得点平均、標準偏差および分散分析結果

友人について知っている数		友人関係	
7以上	$n = 206$	3.21	(0.75)
	$n = 430$	3.33	(0.69)
4～6	$n = 301$	3.08	(0.65)
	$n = 275$	3.15	(0.65)
1～3	$n = 289$	2.80	(0.80)
	$n = 63$	2.74	(0.67)
0	$n = 34$	2.38	(0.89)
	$n = 7$	2.60	(1.52)
F値		21.71	**
		17.39	**
多重比較		7以上・4～6 > 1～3 > 0	
		7以上 > 4～6 > 1～3	

( ) は標準偏差、上段：男子、下段：女子

\*\* :  $p < .01$

表6-1 友人について知っている数カテゴリーごとの悩みを話せる友人数カテゴリーの人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果(男子)

		6人以上 $n = 237$	4～5人 $n = 203$	2～3人 $n = 273$	1人 $n = 34$	0人 $n = 83$	$\chi^2$ 値
7以上	$n = 206$	97	59	38	5	7	
		6.79 **	1.61	-5.09 **	-1.39	-3.64 **	132.65 **
4～6	$n = 301$	81	84	114	7	15	$df = 12$
		-0.79	1.74 †	2.30 *	-1.94 †	-3.63 **	
1～3	$n = 289$	54	56	113	17	49	
		-4.60 **	-2.49 *	2.78 **	1.90 †	4.88 **	
0	$n = 34$	5	4	8	5	12	
		-1.83 †	-1.76 †	-1.19	3.19 **	5.02 **	

下段は調整された残差

† :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

表6-2 友人について知っている数カテゴリーごとの悩みを話せる友人数カテゴリーの人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果(女子)

		6人以上 $n = 187$	4～5人 $n = 234$	2～3人 $n = 297$	1人 $n = 31$	0人 $n = 26$	$\chi^2$ 値
7以上	$n = 430$	121	140	143	19	7	
		2.91 **	1.60	-3.24 **	0.66	-2.98 **	77.91 **
4～6	$n = 275$	53	82	118	10	11	$df = 12$
		-2.34 *	-0.17	1.95 †	0.00	0.74 **	
1～3	$n = 63$	12	11	35	1	5	
		-0.81	-2.43 *	2.69 **	-1.06	2.03 *	
0	$n = 7$	1	1	1	1	3	
		-1.27	-0.50	-0.85	-0.46	7.06 **	

下段は調整された残差

† :  $p < .10$  \* :  $p < .05$  \*\* :  $p < .01$

### 3.3. 友人について知っていることと学校適応との関連

友人関係について知っていることの数と学校適応との関連について検討をおこなった。

学級満足度尺度結果の承認得点と被侵害得点をもとに、河村（1999）の方法にそって「学級生活満足群」「非承認群」「侵害行為認知群」「学級生活不満足群」の4群にカテゴリー化し適応の指標とした。

友人について知っていることの数カテゴリーごとに、学級満足度尺度による4群の出現率を男女別に検討したところ、男女とも出現率の偏りが有意（男子： $\chi^2(9) = 125.20, p < .01$ 、女子： $\chi^2(9) = 99.84, p < .01$ ）であったため、残差分析をおこなった。その結果、男女とも友人について知っていることの数「7以上」のカテゴリー

において、有意に学級生活満足群の出現数が多く、学級生活不満足群の出現数が少ない傾向であった。また、男子は、「1～3」「0」のカテゴリーにおいて、女子は、「4～6」「1～3」のカテゴリーにおいて、有意に学級生活満足群の出現数が少なく、学級生活不満足群の出現数が多い結果であった（表7-1、表7-2）。

友人について知っていることの数、学級満足度尺度結果による4群の出現率と関連があることが明らかになり、7項目以上の選択が良好な学校適応につながる傾向が示された。また、男子においては、友人について知っている数が4未満で、学級生活満足群の減少と学級生活不満足群の増加の傾向がみられたが、女子においては、7未満で同様の傾向が顕著であった。

表7-1 友だちについて知っている数カテゴリーごとの学級満足度尺度4群の人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果（男子）

		学級生活満足群 <i>n</i> = 277	非承認群 <i>n</i> = 183	侵害行為認知群 <i>n</i> = 107	学級生活不満足群 <i>n</i> = 263	$\chi^2$ 値	
7 以上	<i>n</i> = 206	116 8.05 **	31 -2.79 **	34 1.78 †	25 -6.96 **	125.20 <i>df</i> = 9	**
4 ~ 6	<i>n</i> = 301	102 0.24	70 0.63	45 1.34	84 -1.77 †		
1 ~ 3	<i>n</i> = 289	56 -6.25 **	73 1.63	27 -2.23 *	133 6.49 **		
0	<i>n</i> = 34	3 -3.10 **	9 0.64	1 -1.77 †	21 3.85 **		
下段は調整された残差		† : <i>p</i> < .10   * : <i>p</i> < .05   ** : <i>p</i> < .01					

表7-2 友だちについて知っている数カテゴリーごとの学級満足度尺度4群の人数分布および $\chi^2$ 検定、残差分析結果（女子）

		学級生活満足群 <i>n</i> = 327		非承認群 <i>n</i> = 139		侵害行為認知群 <i>n</i> = 103		学級生活不満足群 <i>n</i> = 206		$\chi^2$ 値	
7 以上	<i>n</i> = 430	233		58		70		69		99.84 <i>df</i> = 9	**
		7.55	**	-3.60	**	2.74	**	-7.41	**		
4 ~ 6	<i>n</i> = 275	81		63		29		102			
		-5.33	**	2.68	**	-1.67	†	4.91	**		
1 ~ 3	<i>n</i> = 64	11		16		3		34			
		-4.31	**	1.47		-1.77	†	4.91	**		
0	<i>n</i> = 6	2		2		1		1			
		-0.10		1.29		-0.88		-0.33			
下段は調整された残差				† : <i>p</i> < .10		* : <i>p</i> < .05		** : <i>p</i> < .01			

表8 判別分析におけるグループ重心の関数

	男子 $n = 830$	女子 $n = 775$
学級生活満足群	.547	.423
非承認群	-.190	-.433
侵害行為認知群	.223	.200
学級生活不満足群	-.535	-.479

表9 判別分析における標準化された正準判別関数係数

	男子 $n = 830$	女子 $n = 775$
好きな歌手やタレント	.165	.140
好きな食べ物	.086	.103
好きな教科	.351	.330
見ているテレビ番組	.127	.238
誕生日	.122	-.058
家族のメンバー	-.032	.018
家族の職業	.106	.116
友だち関係	.351	.326
将来の夢	.119	.188
好きな人やつき合っている人	.241	.194
自分と相手だけの秘密	.245	.357



### 3.4. 友人について知っていることの特徴と学校適応との関連

友人について知っていることの中で、学校適応に関連する重要度の高い項目を検討するために、友人について知っていることの各項目の選択の有無をダミー変数として説明変数に設定し、学級満足度尺度結果をもとにカテゴリー化した4群を従属変数とした判別分析をおこなった。その結果、男女とも第一判別関数のみが有意(男子：正準相関＝.413、説明率＝83.6%、 $p < .01$ 、女子：正準相関＝.387、説明率＝84.3%、 $p < .01$ )となり、第一判別関数に識別力があると判断された。第一判別関数の結果を見ると、グループ重心の関数は、男女とも学級生活満足群と学級生活不満足群についての影響力が大きい傾向を示した。また、女子においては、非承認群についても影響力があることが明らかになった(表8)。標準化された正準判別関数係数(表9)から、男女ともに「好きな教科」「友だち関係」、女子においては「自分と相手だけの秘密」の影響力が比較的大きいことが明らかになった。

## 4. 考察

### 4.1. 友人について知っていること

友だちについて知っていることの出現数が全項目にわたって女子の方が多い傾向がみられた。榎本(1997)は、女子の自己開示度が一般的に高いことを指摘している。女子のほうが友だちについて知っていることの選択数が多い結果は、自己開示的であることが、友人について知る項目の選択の多さにつながった可能性が考えられる。

友人について知っている項目の選択が多い生徒ほど、友人といると元気がでたり、ホッしたり、落ち着いたりすると認知している傾向が大きく、悩みが話せる友人の数も多い傾向が明らかになった。友人について知っていることは、友人のことを知る機会と、知り合う関係性があることの2つの側面から考えることができる。友人について知っている項目の選択が多い生徒は、かかわりの機会が多いことやお互いのことを自己開示し合う関係性をもっていることが推測される。友人について知っていることの多さは、友人関係の様相を反映する一つの指標となる可能性が示唆された。

### 4.2. 友人関係と学校適応

友人について知っている数が多いほど、学校適応が良好である傾向が明らかになった。小野寺・河村(2002a)は、中学生において級友に対する自己開示の程度が学校適応に関連することを明らかにしている。友人について知っている項目の数と学校適応とが関連しているという本研究で得られた結果は、一定の自己開示があることが、

友人についてより多く知り合う関係性を促進し、学校適応を支えている可能性が考えられる。

本研究でもちいた11項目は、比較的自己開示のレベルが浅いと考えられる「好きなテレビ番組」「好きな食べ物」から、自己開示のレベルが深いと考えられる「将来の夢」「自分と相手だけの秘密」までが含まれている。本研究でもちいた11項目中7項目以上の選択があることが、男女ともに適応が良好であることを支えている結果であったことは、比較的自己開示の浅いレベルの項目から、やや自己開示が深いレベルの項目まで知り合う程度の関係性が、学校適応につながる可能性が示唆されたと考えられる。

しかし、学校適応に影響をもつ項目の特徴の分析では、男女ともに、自己開示のレベルが比較的深くないと考えられる「好きな教科」「友だち関係」が学校適応に比較的影響をもつ結果であった。小野寺・河村(2002a)は、自己開示度が高い生徒が学級生活に満足している傾向を指摘しており、本研究でも、男子において「好きな人やつきあっている人」、女子において「自分と相手だけの秘密」の影響力が比較的大きかったことは、この結果を支持するものと考えられる。しかし、自己開示度は、関係の程度や発達に合わせて段階があると考えられ、かかわりのきっかけ時の自己開示の内容は、比較的浅いレベルから始まり、関係性が深まっていくにつれて、徐々に深い自己開示がなされていくことが考えられる。そのため、本研究で、比較的浅い自己開示のレベルの項目が影響力をもつ結果となったのは、関係の程度がそれほど深くない状態を反映したものと推測された。

### 4.3. まとめ

本研究では、「親しい友人について知っていること」を友人関係の質的側面をとらえる視点として、中学生の友人関係と学校適応との関連を検討することが目的であった。分析の結果、親しい友人について知っていることが多い生徒が、元気がでたり落ち着いたり、悩みを話すことができる良好な友人関係をもち、学校適応についても良好である傾向が明らかになった。また、知っている項目内容については、自己開示レベルの高いものだけでなく、比較的浅いレベルの内容も影響力をもっていることが示された。これらの結果から、中学生の学校適応と友人関係のあり方とは関連しており、生徒の学校適応を支えるためには、お互いのことを知り合っているという友人との関係性が必要であることが示唆されている。中学生の学校不適応の予防・開発的援助において、意図的に生徒同士がお互いのことを知り合う機会をつくる活動を設定することなどが効果をもつ可能性が考えられる。その際には、自己開示のレベルをただ高く設定するのではなく、生徒同士の関係の程度の把握にもとづいて

心理的抵抗の生じない自己開示のレベルから経験を重ねさせることが、無理なく友人関係を形成し、良好な学校適応につながる援助になると考えられる。

## 5. 今後の課題

本研究では、親しい友人について知っている内容について項目をあらかじめ選定して、学校適応をと関連する友人関係の特徴を明らかにしようと試みた。結果から中学生の友人関係と学校適応に関連する特徴の一端を明らかにすることができたと考えられる。今後さらに多様な内容について検討を重ね、学校不適応の予防・開発的援助のための具体的なプログラム作成につなげていくことが課題である。また、今回は学校適応について、学級満足度尺度によって測定して検討したが、今後、学校適応を支えるさまざまな要因との関連を検討していくことが課題である。

## 引用文献

- 榎本博明 1997 自己開示の心理学的研究 北大路書房
- 粕谷貴志・河村茂雄 2002 学校生活満足度尺度をもちいた学校不適応のアセスメントと介入の視点-学校生活満足度と欠席行動との関連および学校不適応の臨床像の検討— カウンセリング研究, 35, 116-123.
- 河村茂雄 1999 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発(1)—学校生活満足度尺度(中学生用)の作成— カウンセリング研究, 35, 274-282.
- 学校不適応検討委員会 1991 学校不適応検討委員会第一次報告書
- 文部科学省 2001 不登校に関する実態調査-平成5年度不登校追跡調査- 平成5年度不登校生徒追跡調査報告書
- 文部科学省 2011 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 文部科学省 2012 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査
- 小野寺正己・河村茂雄 2002a 中学校の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, 35, 47-56.
- 小野寺正己・河村茂雄 2002b 中学生用学級内自己開示尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 カウンセリング研究, 35, 133-138.
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究, 50, 12-22.
- 中央教育審議会 2008 幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)